



CONTENTS

《法令用語》 「特殊教育」

特集
特殊教育の改善・充実に
向けた施策

《巻頭論文》
特殊教育の改善・充実に向けて 亀井 浩明 4

《解説》
特殊教育の改善・充実に向けた施策 特殊教育課 9

《事例紹介》
北海道雨竜高等養護学校、北海道立特殊教育センター、高橋もところ、沖縄県立大平養護学校、栗原正人、筑波大学附属聾学校、香川県教育委員会、白石市教育委員会 16

《解説》
生涯学習の成果を生かすための方策について 生涯学習振興課 47

《資料》
生涯学習審議会「生涯学習の成果を生かすための方策について」(審議の概要) 52

《シリーズ 教育委員会の施策紹介①》
町を育てる学力の育成をめざして—森と水のシンフォニーの中で—
..... 岩手県岩泉町教育委員会 72

《学校管理Q & A》
病気休職 地方課 76

《お知らせ》
平成9年春の叙勲 78
新国立劇場の開場について 文化庁芸術文化課 79

教育長紹介 83

ひとりごと 90

事例紹介 1

映画「学校Ⅱ」の制作に参画して

北海道雨竜高等養護学校

「学校Ⅱ」のあらすじ

北海道のほぼ中央にある滝川市にほど近い小さな町にある竜別（りゅうべつ）（雨竜）高等養護学校を舞台にしてくりひろげられる物語である。

卒業式も迫るある日、リユー先生（西田敏行）と小林先生（長瀬正敏）は、寄宿舎を抜け出した二人の生徒を探するため、夜の自動車道を旭川へと向かった。

三年前、知恵の遅れはさほどでないが、いじめによって心を閉ざし、ひと言も口をきこうとしない高志（吉岡秀高）と、片時もじつとせず、奇声を発してあばれる佑矢（神戸浩）が三人の教師のクラスに入学してきた。

夏休みのあけたある日、ダウン症の女生徒が初めて書いた作文を読み上げていた玲子先生（いしだあゆみ）の手から用紙をひったくろうと暴れる佑矢に向かって「う

るさいぞ！静かに字を勉強するんだ！わかったら手をあげろ！」とどなったのは高志だった。佑矢は「はい！」と手をあげた。この日から二人は慕い合い、大きく変わっていった。

旭川で一夜を明かした二人の教師は、雪原で熱気球に乗って楽しげに大声をあげる高志と佑矢に巡り合う。

北海道の精神薄弱高等養護学校

北海道の精神薄弱高等養護学校は、社会自立を目指し、社会生活や職業生活に必要とする基礎的・基本的な知識、技能、態度及び習慣の育成に努めている学校である。北海道にはこうした学校が、来年度に設置される予定校を合わせて、二一校あり、生徒は全員寄宿舎生活を送っている。それぞれの学校は、地域の特色を取り入れた職業教育を主とする学科を置いている。

撮影の舞台となった雨竜高等養護学校は、滝川市の北東に位置する人口三、五〇〇人程度で米作中心の小さな雨竜町にある。一四年前に設置されて以来、生徒一六〇名、教職員一三〇名が町で生活をしている。

山田洋次監督からの協力依頼

雨竜高等養護学校長を勤めていた平成七年一月の下旬



リユー先生役の西田敏行さんとともに

に、山田洋次監督他三名の突然の訪問を受けた。雨竜高等養護学校を舞台にした映画作りに、是非協力してほしいとの申し入れであった。

本校の生徒及び職員をテーマにした映画制作についてであり、その取扱いと許可については慎重に検討しなければならぬ。山田洋次監督には後日返事することでお引き取りを願った。

検討しなければならない事項とは、①映画制作の協力に当たっての基本条件、②教育活動と寄宿舎生活に及ぼす影響、③施設管理面、④教職員、生徒、父母町民への対応、⑤上映後の反応、などである。

これらについて北海道教育委員会の指導・連絡を受けながら、半年かけて検討し、監督の申し出に応えることにした。

撮影の事前準備

監督の一回目の学校訪問から半月後に、二回目の学校見学が監督以下二名で行われた。生徒のスキー学習や授業等の取材が行われた。その十日後の卒業式には、プロデューサー他二名がビデオ撮りに来校し、職員からも詳しく取材していった。

脚本制作担当者やプロデューサーは一週間ほど宿に缶

詰になって構想を練っていた。私はこの様子を見ていて脚本作りもやはり大変なものであると思った。脚本作りに携わっている担当者は、この構想を練る時期が一番楽しい時だと言っておられた。

卒業式の取材は二年続けて熱心に行われたが、そのメンバーの中の一人、俳優の西田敏行さんは、目を赤くし

て、何度もハンカチを目に持っていきながら見学してもられた。優しいお人柄がうかがえた。

生徒役になる若い俳優は、生徒の中へ入っていき一緒に振る舞い、何とかして生徒役になりきろうと努力していた。

カメラの担当者は、冬の北海道らしさを表す所をと、夜遅くまで、その場所の選定に奔走していた。

予定より遅れて、いよいよ脚本ができてきた。映画会社との事前約束のとおり、映画の内容について、事前に確認を行い、脚本の事前チェックをした。細かな箇所では何かチェックはしたが、大きな問題もなく終えることができた。

撮影

雪が溶けないうちにとのことで、総勢八〇名におよぶスタッフが、隣町・滝川市のホテルから雨竜高等養護学校へやってきての撮影が開始された。

この映画には、本校の生徒男女各一名ずつの二名が出演している。監督は、どんな俳優をもついてもこの二人の生徒にはかなわないと言っている。

最後のシーンで、若い担任の先生がホームルームで生徒にお別れの言葉を言い始めた時、全く予期しなかった

をくり返し、ようやく四回目まで本番を撮り終えたシーンがあったそうだ。

このほかに、多くの雨竜高等養護学校の生徒や教職員がいろいろな場面で出演して協力をしている。

鑑賞者の感想

全道各地で鑑賞会が行われ、多くの方々がこの映画を鑑賞した。

雨竜町の隣り滝川市では、一、八〇〇人近くが鑑賞会に参加し、隣町の出来事への関心の高さがうかがえた。

幾つかの感想を拾ってみると、

・映画は、私にはまだむずかしいけど、かなしく感じました。(八才小学生)

・映画の中の先生を見て、障害の重い人に付ききりということなどが、すごく大変ということがわかりました。障害のある人の気持ちもわかりました。(二〇代女性)

・ラストシーンでの、先生からの言葉「三年間何にも出来なくてごめんね」に感動しました。(三〇代男性)

・すばらしい映画ですね。今度は家族皆で見て話したいと思いました。(四〇代女性)

・人間に対する本当の暖かい視点がすばらしいと思いました。自分がいままで見失っていた気持ちを思い起こ



卒業シーンの撮影風景

ことがおきた。出演した女生徒が、脚本にはない、先生の手をスツと握る行動をとった。若い先生役の俳優は、本番のこともあって、感激のあまり、急に大声で泣き出してしまった。泣きながらセリフを言うため、撮り直し

させられたような気がします。(五〇代男性)

全国からも学校へさまざまな内容の便りが直接寄せられていて、この映画の反響の大きさがうかがえる。

終わりに

山田洋次監督から映画の話が持ち込まれてから三年目にして「学校Ⅱ」ができた。

映画「学校Ⅱ」は、多くの人々に感動を与えている。私は、山田洋次監督が話し合いの中で静かに力強く次のように話されたのを思い起こす。「養護学校の先生は、懸命になって子どもを理解しようと努力し、その子どもと共感できることを探ります。決まりきったワンパターンの教育は絶対にあり得ません。この映画が、学校や教育の在り方について、もう一度考え直すきっかけになればと考えました。教育全般に関するメッセージが伝わればいいなあと思います。」

※映画「学校Ⅱ」は、平成八年度(第七回)文化庁優秀映画賞(長編映画部門)、第二〇回日本アカデミー賞、優秀作品撮影賞、他多数を受賞している。

(前北海道雨竜高等養護学校長 小野 司)
(現北海道真駒内養護学校長

教育委員会月報 6月号(第49巻 第3号) 通巻第567号 MESSC 63

平成9年6月10日発行 定価310円 本体295円 (〒76円)

著作権所有 文 部 省
発行者 第一法規出版株式会社 代表者 田 中 英 雄
東京都港区南青山2丁目11番17号
印刷者 大日本法令印刷株式会社 代表者 田 中 忠
東京都港区西新橋3丁目6番10号

発行所 第一法規出版株式会社
東京都港区南青山2丁目11番17号
電話03-3404-2251(代)

本誌に掲載した記事、意見にわたる部分については、それぞれ
筆者の個人的見解であることをお断りいたします。